

日本学術会議の在り方に関する政策討議（第9回）
（総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会）

議事概要

- 日 時 令和4年1月20日（木）11：08～11：37
- 場 所 中央合同庁舎第8号館 6階623会議室
- 出席者 上山議員、梶原議員（Web）、小谷議員（Web）、佐藤議員（Web）、
篠原議員、橋本議員（Web）、藤井議員（Web）
（事務局）
大塚内閣府審議官、米田統括官、合田審議官、井上事務局長補、覺道審議官、
阿蘇審議官、高原審議官、橋爪参事官
（内閣府大臣官房総合政策推進室）
笹川室長、黒瀬副室長、児玉参事官
- 議題 日本学術会議の在り方に関する政策討議（第9回）
・日本学術会議の在り方についての自由討議【非公開】

○ 議事概要

午前11時08分 開会

○上山議員 それでは、ただいまより第9回の日本学術会議の在り方に関する政策討議として、総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会を始めます。

本日は、内閣府から大臣官房総合政策推進室に参加を頂いています。小林大臣は公務の都合により欠席と聞いております。

それでは、議事に入ります。

なお、会議の記録及び会議の公開、非公開については第1回の政策討議で決めたとおりいたします。

それから、前回の政策討議の議事概要は有識者議員の皆様到现在御確認を頂いており、発言の皆様の確認が終わり次第公表いたします。

議題は、日本学術会議の在り方についての自由討議とさせていただきます。率直な意見交換の確保のため、議事は非公開とさせていただきます、CSTI有識者議員以外の同席者、随

行者も退席を願います。申し訳ございませんけれども、プレスの皆様もここで御退室をお願いいたします。

C S T I 有識者議員同士のディスカッション部分の議事概要の扱いに倣い、後日発言者名を伏せたものを公表させていただきたいと存じます。

【プレス・同席者・随行者 退室】

○ 第1回の政策討議において、C S T I 有識者議員と日本学術会議会長という二つの立場をお持ちの梶田議員については、議論の内容によっては御遠慮いただくこともあり得るとしてきたところです。既に梶田会長は退室されておりますけれども、このことに関して改めて皆様方、この形によろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、配布資料ですが、意見交換に資するため、これまでの政策討議の意見交換でまとめた資料1「日本学術会議の在り方に関する政策討議」における主な意見等、前回の政策討議で配布したものと同じものですが、資料2「当面の論点（未定稿）」を配布させていただいております。

さて、小林大臣から14日、金曜日の閣議後記者会見において、「本政策討議もこれまで8回にわたって議論をしてきて、大分議論も深まってきたと聞いている。そろそろこれまでの議論を整理して報告してもらえないか。」という御発言があったと承知しております。私といたしましても、本政策討議においてかなり議論を積み重ね、論点が整理されてきたと思いますので、今回は取りまとめもあり得るということ念頭に置いて議論を行うということによろしいでしょうか。

はい、ではその形で進めさせていただきます。

それでは、あらかじめ会議資料として配布しておりませんでした。前回までの政策討議での議論を踏まえた日本学術会議の在り方に関する政策討議取りまとめ案を配布させていただきます。この取りまとめ案は、追加配布資料として他の資料と併せて、明日ホームページにおいて公表をさせていただくことといたします。

それでは、議事の進行に入ります。まず、日本学術会議の在り方に関する政策討議取りまとめ案について、その概要を事務局から説明をお願いいたします。

○ 下線が引かれた部分を中心に簡潔に説明します。

本文は、取りまとめの視点などを記した「1 序」の後、論点ごとに、「2 日本学術会議の科学的助言機能」、「3 科学者間のネットワーク構築と会員選考等」、「4 日本学術会議の財務及び組織形態等」と整理し、「5 結論」と構成しております。

1 ページ、1、序、(1)検討の経緯、政策討議の趣旨等において、最初のポツ、井上大臣から、学術会議の改革の検討をさらに進めるためには外部の視点を取り入れることが重要であり、その一環として、学術会議の在り方について、C S T I 有識者議員懇談会の場で議論を行うよう要請があったことを受けて、三つ目のポツ、政策討議を9回にわたり開催した、としております。

2 ページ、(2)検討の必要性、とりまとめの視点です。下から二つ目のポツ、学術会議の在り方について、設置された目的、趣旨などを十分に踏まえつつ、求められる役割、機能が何か、どのような部分をどのように改善・強化していくべきか、学術会議が本来発揮すべき役割、機能を果たし、国民に理解され信頼される存在で在り続けるためにリソースの制約や組織形態が支障となっていないか等の観点から議論と検討を行い、とりまとめを行ったとしています。

一番下のポツ、要請を受けた際、最終的には政府としての方針を責任をもってしっかり示していくという政府のスタンスが表明されたとしています。

2、学術会議の科学的助言機能についてです。5 ページになります。一つ目のポツ、2 段落目、学術会議に期待されることは、課題の持つ緊急性や求められる解決策の時間軸に合わせて、迅速に対応すべき事項とその時間軸を対外的に示しつつ、政策立案者等への時宜を得た科学的助言や社会からの要請への対応を行うことであるとしています。

二つ目のポツ、学術会議からは、学術会議は論点がまとまらぬまま論文をまとめることはできないという研究者の集団であり、会員の集団が納得できるような審議の結果としての提言を短い期間で発出することはできず、政策決定や企業経営における意思決定と同様の時間軸での対応を一律に求められるのは困難であるとの意見が示されたとしています。

3、科学者間のネットワーク構築と会員選考等について、6 ページです。(4) 方針の一つ目のポツ、自らの専門性を背景としつつも、中長期的、俯瞰的分野横断的な視点から活動できるような科学者から、学際分野・新分野も含めてバランスよく会員が選考されることはもちろん、科学者間ネットワークを活用し、学術会議内外の専門家が課題に応じて参画するような柔軟、流動的な仕組みを構築することが必要ではないか、との提案がなされた、

二つ目のポツ、調査・分析や課題設定、提言等の作成過程には、産学官の幅広い人材、学位保持者からなる強力な事務局体制が不可欠であり、学術会議はその構築に一層の努力を払うこ

とが必要ではないかという提案も行ったとしています。

4、学術会議の財務及び組織形態等について、7ページです。(3)方針のポツ、最終的な組織形態とは切り離しても、所要の事務局機能、財政基盤等の再構築は不可欠であるとする、また、学術会議が国民から理解され信頼される組織であり続けるためには、必要な改革が一定の時間軸の下で迅速に活動に反映されていくことも必要であるとする、としています。

8ページ、最初のポツで、政策討議の中で、仮に学術会議の現状のリソースや体制では十分な改革を行き得ないとすれば、組織体制の見直しも視野に入れたより抜本的・構造的な改革が必要との意見があった、などとしています。

二つ目のポツで、日学報告は第25期に責任を負う現執行部が中心となって基本的には期中の3年間で取り組む改革について記載したもの、などとする学術会議の説明を記載しています。

5、結論です。8ページ、最初のポツの下線、学術会議の改革については、学術会議に自ら主体的に考えていただくことが何よりも重要であるという認識の下、学術会議の自己改革の円滑な進展を強く期待するとしています。

二つ目のポツの下線、本政策討議としては、「車の両輪」である学術会議と対応継続していくというスタンスを確認するとしています。

それから、すみません、9ページの一番上、「たとえば、」というところなんですけれども、「これまでの政策討議の議論の中で、」というところは落としてしまいたいと考えております。

その科学的助言機能強化のところなんですけれども、学術会議が取組を進める中長期的、俯瞰的分野横断的な課題を一例として取り上げ、一連のプロセスにおいて、例えば数か月程度など、一定の期間ごとに活動状況を確認し、意見交換を行う場を設けることにより、学術会議自身が改革を進めるに当たってのあい路の発見・解消や必要なサポートを共に考えていくことを改めて提案するとしています。

9ページ、最初のポツ、本政策討議においては、制度設計に関する学術会議からの前向きな提案も期待しつつ、既存のリソースや組織体制を前提とせずにあるべき姿の議論を試みた、中長期的・俯瞰的分野横断的な課題への対応が重要性を増しつつあること、そのような視点から活動できるような会員がバランスよく選考されることが重要であることなど、学術会議の役割・機能の方向性については基本的には大きな相違はなかったのではないかと考えられる、しかしながら、改革のフレームや時間軸についての考え方や具体的な進め方などについては、必ずしも一致をみていないことが認識された、としています。

二つ目のポツ、現在の学術会議の組織形態が我が国の政治体制・法体系の中で一定の合理性

を有してきたのだとしても、本政策討議では、これまでの改革の際の議論等を踏まえても、緊急的課題や中長期的、俯瞰的分野横断的な課題に関する政策立案者等への時宜を得た科学的助言や社会からの要請への対応という観点からは、現在の組織形態が最適なものであるという確証は得られていない、としています。

そして、三つ目のポツ、今後、政府において学術会議の在り方についての方針を示していくに当たっては、学術会議が本来発揮すべき役割を果たし、国民に理解され信頼される存在で在り続けるようにという観点から、本とりまとめを含む政策討議などの一連の議論、日学報告及びこれに基づく自己改革の進捗状況等を踏まえ、意思決定や活動の機動性・弾力性、財政基盤、事務局機能など議論の過程で取り上げられた論点、組織形態に関して考えられる選択肢などについて、各国アカデミーの制度や運用状況も十分参考にしつつ、学術会議との対話を継続しながら、総合的な検討が行われることを希望する、

組織形態についても、既存のリソースや組織体制を前提とするのではなく、学術会議が国民から求められる役割・機能は何か、それを最大限に発揮するためにはどのような在り方が最適かという観点から、他の論点と共に検討が深められることを希望する、としています。

雑ぱくではございますが、私からの説明は以上です。

○ ありがとうございます。

それでは、これが現在の取りまとめ案でございます。かなり慎重に内部では議論をしてまいりました。これを提示させていただきますので、御意見を頂きたいと思えます。どなたでも結構ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

○ すみません、8ページ、9ページの最初のところで、一部落とすとおっしゃっていたところの確認だけさせていただいてよろしいでしょうか。

○ 失礼いたします。

9ページの一番最初の行で、「これまでの政策討議の議論の中で」という部分でございます。すみません、これ修正によって文章が乱れましたので、削除します。

○ この文章が、日本学術会議が取組を進める中長期的、俯瞰的、分野横断的な課題、というふうになる。

○ 失礼します。科学的助言機能の強化について、ポツ、日本学術会議が取組を進める中長期的うんぬん、でございます。

○ 分かりました。ありがとうございます。

○ 大きな内部の変更はないと思えます。よろしいでしょうか。

手が挙がってますね。どうぞ。

○ ありがとうございます。

取りまとめ案、非常に御苦労されて作られたことがしのばれて、本当にお疲れ様でした。ここまでの書きぶりで行くという強い意志が感じられますので、内容については同意させていただきます。

ただ一点、今後のC S T Iと日学の改革の関係というものがどうなっていくのかということについても考えておく必要があるのではないのでしょうか。ここで一旦切って、あとは政治的な判断にお任せするという事なのか、日学の自己改革のフォローアップ、フォローアップという言葉をまたおかしくなりますが、そういったものをC S T Iの中でも見ていくのかという点です。私は個人的にはC S T I側がもっと日学を巻き込んでいろんなプロジェクトで彼らを使っていく、あるいは彼らと一緒に、正に車の両輪として彼らをインクルードしていくということが、そういった努力もあった方がいいのかなというふうに思っています。今後の日学の改革あるいは将来、これからまた詰めなければならぬことが幾つかあるわけですが、その中におけるC S T Iの役割はどういうふうに位置づけられていくのか。

政府に渡した後、政府側からもう一度改めて日学問題におけるC S T Iの役割というのが与えられるのかどうかというのはこれからの話ですから、その御判断を待つことが一つ。もう一つは、それがどうであれ、C S T Iそのものの考え方として日学とどう関わっていくのかという、二つのパートに分けて考えるべきだと思います。最初のパーツは、これは僕らが決めることではなくて政府が決めることですから、その御判断を待たなければなりません、今後2番目のパーツというものについて我々として考える余地があるような気がします。

○ ありがとうございます。

他の方々はいかがでしょう。様々ないきさつはありましたが、今の現状においてお互いの立場を考えてこれで正しいのではないかなと思っています。

他にいかがでしょう。

○ この最後の結びのところも非常にクリアで、非常にうまくまとまっていると思いますので、私としては異論ございません。

○ いかがでいらっしゃいますか。この政策討議の最初の回で、報告書がもしまとまることになるのであれば、あるいは出すのであれば、議員の皆さんのお名前をそこに載せて報告書として小林大臣に上げてもらうということだと申しましたが、これでよろしければ、議員の方々の全員のお名前をここに出して、議員報告書として提出したいというふうに思います。よろしい

でしょうか。手が挙がりましたね。

○ 念のために確認をさせてください。6 ページに、若手研究者の活用やグローバルな視点を取り入れるために、外国人が審議に参加する仕組みが必要ではないか、とあります。これを読むと、若手を活用するために外国人が参加すると読めました。この表現が2か所ありますが、これで正しいのでしょうか。

○ そうですね、ちょっとここ二つを分けるような形で直した方がいいのかもしれませんが、今御指摘いただいてそう思いました。これ事務方の方で検討ください。

○ 承知しました。すみません。

○ 2か所あります。お願いします。

○ ありがとうございます。

他の方々よろしいでしょうか。では、幾つかの修正を加えさせていただいて、これで我々 C S T I の議員としての学術会議の討議の結論とさせていただきます。

改めて申し上げますけれども、ずっと議論してまいりましたけれども、まず第一に、この政策討議では C S T I と日本学術会議は車の両輪という立場を強調したということ。第二に、一定期間ごとに大きなテーマについて学術会議から政策提案をしてはいかがかと問いかけましたが、それについては難しいというような反応があったと理解をしております。また、日本学術会議の役割や重要性あるいは方向性については、これは車の両輪の立場からも我々と基本的に意見は一致している、学術会議の重要性は理解しているということで合意しましたが、残念ながら、改革のフレームやあるいは時間軸についての考え方、あるいは具体的な進め方については意見の一致は難しかったというふうに思っております。組織形態についても同様でございます。C S T I 側の議員の方々の方々の発言の中には、緊急的課題とか、あるいは中長期的、俯瞰的、横断的な課題に対する政策立案者にとって有意義な助言あるいは社会からの要請に対する対応というそういうことを求める声が上がりました。それを達成するためには、現在の組織形態が最適なものであるかどうかについては我々の中でも確証は得られなかったというそういう結論で書いております。

以上、現在の日本学術会議の執行部の人たちとの間である程度の意見の共通基盤を見出せたけれども、最終的な組織形態やあるいは学術会議が公的に果たすべき役割のある部分については認識は一致しなかったと考えております。

今後とも日本学術会議との対話は、先ほど御指摘ありましたけれども、何らかの形で政策論議の中で継続をしていき、それを通して日本学術会議が国民から理解され信頼される存在であ

るために、またその最適な在り方を認識に置きながら今後とも関係を深めていきたいと考えております。

ということで、本政策討議はここで一区切りをつけたいと思います。学会議が今後どのような形で我々の政策決定のプロセスにも関わってくるかまだ分かりませんが、これからも対話を続けていきたいと考えております。

それでは、本日の議論を踏まえた表現の修正などは私に御一任いただきまして、梶田議員を除くCSTI有識者議員連名で、日本学会議の在り方に関する政策討議の取りまとめを後日科学技術政策担当大臣に提出することといたします。その提出方法につきましても座長に御一任を頂ければと存じます。よろしいでしょうか。

○ はい、御苦労さまです。

○ ありがとうございます。

では、この取りまとめはCSTI有識者議員に事務的にお届けをさせていただきます。そして、科学技術担当大臣に提出した後、先ほどお話も既にありましたけれども、大臣から公表いただくこととし、公表後速やかにホームページに掲載するという形になります。よろしく願います。

では、議事概要に関して、非公開の部分に関するCSTI有識者議員の皆様の御発言部分につきましては、それぞれ御確認を頂いた上で、発言者を伏した形で約1か月後に公表させていただきます。

本政策討議としての今後の日本学会議との対話につきましては、CSTI有識者議員の皆さんと御相談をさせていただきたいと存じております。

どうもありがとうございました。

午後11時37分 閉会